

審査員特別賞

「幸せの輪」を世界へ

立命館守山高等学校 3年 前田 穂乃花

「幸せとは何ですか。」この問いに対し誰一人として同じ解を持たないのは個人の感情だけでなく国内情勢が関係していると考えたのは今年の夏に参加したカンボジアオンラインボランティア研修を経験してからであった。この研修では教員不足で教育が十分に行き届かないカンボジアの子ども達に向けて先生となり授業を行う。この研修では授業以外でも子ども達と話す機会があり、私はさりげなく「今一番欲しい物はなんですか」と尋ねた。返ってきた答えは「教科書と文房具」であった。可愛いお洋服やおもちゃなど、私が予想していた答えとかけ離れていたことに貧困・格差を感じた。

学校に通う事が日常化し当たり前だと感じている学生が日本では多い中、カンボジアの子供達はそうは感じていない。この状況下で文房具を手にした時、幸せのバロメーターには差が生まれる。学校通学が日常化している子供達にとって文房具は、カンボジアの子供達ほど特別ではないだろう。文房具が当たり前にあるように、幸せのバロメーターの基準が常に高い状態であるのか、あるいは文房具は十分でないが、一つのもの価値が高く感じられるという、幸せのバロメーターの基準が低い方が幸せなのか。どちらの方が幸せなのか考えたが、どちらでもないという結論に至った。お互いの幸せを共有することこそ「幸せ」だと言えらると思うからだ。私はカンボジアの子供達と話し、「文具を貰った時の彼らの笑顔」を想像する事で幸せを感じた。一方でカンボジアの子供達は文具について話したり、聞いたりする事が嬉しい、幸せだと話してくれた。私は文房具が彼らにとって大きな幸せとなる事を知らなかった。つまり、「幸せ」とは世界との対話や交流をしてこそ見出せるものだと考えたのだ。

世界に「幸せ」を届ける一人になろうと、国を超えた交流が大切だと学んだ私は更に多くの子供達と交流しようと思った。この思いから現在、サンスター日本語学校日本語教師インターシッププログラムに参加し、ポーランドの学生に日本語を教えている。ポーランドには日本人が少なく、対話する機会を設けることが難しい為、ボランティアでの参加をととても歓迎してくれた。メンターの兵頭先生は「あなたと話せたことが彼らにとって自信となり、一生忘れられない喜びと思い出になる」とおっしゃった。私は彼らと交流する事で大きな思い出を与えられていることに喜びと幸せを感じた。幸せな気持ちは私自身だけでなく彼らにも対話をする事が出来た喜びから生まれると知り、世界に幸せを届けられていると実感した。今後も日本語を通して彼らと交流し、幸せを届けていきたい。

また、私が通学している立命館守山高校では夏休みに小四・五年生を対象としたオープンキャンパス「りつもりサマースクール」を開催している。その中の一つのプログラムとして留学生と交流することができる体験レッスンが設けられている。このプログラムにて私は、小学生と留学生との交流を手助けするファシリテーターとして参加した。小学生の世界への興味のトビラを開き、対話する楽しさを感じてもらいたいと思い参加を希望した。そうすることで「幸せ」を広げたいと思う人材の育成をしたいと考えた。参加した小学生は「対話が楽しかったからまた話したい」と言ってくれた。交流を世界に広げ「幸せ」を届けようと思う第一歩を踏み出すサポートが出来たと感じた。

国を超えた交流は「幸せ」を生む。「幸せ」を広げる人材を増やし、大きな「幸せの輪」を作ることこそ迫り続ける世界のあらゆる難局を乗り越えていける。私はそう信じている。私はこれからも輪を広げる一人として世界との交流を続けていく。